

否定の「ない」と呼応する程度副詞について

張 麗群

1 はじめに

本稿は否定の「ない」と呼応して用いられる程度副詞¹について考察しようとするものである。程度副詞は通常形容詞、形容動詞、情態副詞、動詞と共起し、それぞれの状態の程度性を修飾限定するものをさすが、中にはさらに他の機能を持つものもある。「なかなか」と「とても」がそうである。

(1) 金魚を飼ったり、花を栽培するのはなかなか(とても)おもしろい。²

(2) 昔のままの東京駅ならいざ知らず、少なくとも現状のものが東京の玄関口にふさわしい建物だととても(なかなか)思えない。³ 『天』

(1)における「なかなか」と「とても」は「非常に、かなり、相当」といった他の程度大の程度副詞と同様に機能しているため、「非常に」などに置き換えても、可能である。⁴ しかし、(2)の場合は(1)と異なり、否定の「ない」と呼応して用いられる用法である。森田(1980)では「なかなか」のこのような用法に触れ、共起対象となる動詞の否定形について、次のように述べている。

動詞が否定形をとることによって、動作性から“～しない／～できない／～とはならない”という状態性に変わる

森田は否定構文を一つの状態性のあるものと見なし、それを程度副詞の被修飾語となるもの(形容詞、形容動詞など)の性質と同一視している。しかし、同じ状態性といっても、

¹程度副詞は通常肯定形に用いられるが、中には陳述副詞「決して、必ずしも」などのように「ない」と呼応して用いられるものがある。本稿は程度大の程度副詞として機能するにもかかわらず、「ない」と呼応する機能も兼ねる「なかなか」と「とても」を取り上げることにする。

²「なかなか」のかわりに「とても」を用いても適格である。原文は「なかなか」であるが、括弧の「とても」は筆者の付け加えたものである。

³「とても」のかわりに「なかなか」も使用できる。括弧の「なかなか」は筆者の付け加えたものである。

⁴(1)の例は「非常に」などを用いても適格であるが、ただし、「とても」は「非常に」などと同じように程度の強弱を表すが、「なかなか」は程度大を表すと同時に、話し手の評価も含む。これについては張(1992)を参照されたい。

動詞の否定形による状態性と形容詞、形容動詞の肯定形による状態性とは程度副詞の修飾を受ける場合の振る舞い方が異なる。つまり、状態性を表す形容詞、形容動詞の肯定形は程度副詞の修飾を受けるが、その否定形は普通程度副詞の修飾を受けない。⁵ 従って(2)の文の場合、「なかなか」のかわりに、普通の程度副詞を用いることはできない。

- (3) 昔のままの東京駅ならいざ知らず、少なくとも現状のものが東京の玄関口にふさわしい建物だとは (*非常に *かなり *相当 *はなはだ) 思えない。

(3) のように、程度副詞を用いることができないにもかかわらず、「とても」「なかなか」を用いることができる。こうしたことから、いわゆる程度副詞と「とても」「なかなか」とをまったく同様に扱うには無理があるのではないかと思われる。と言って、否定の「ない」と呼応する「なかなか」と「とても」を程度副詞から完全に除外するのも都合が悪い。というのは「なかなか」と「とても」は否定の「ない」と呼応するものの、陳述副詞⁶とされる「ちっとも、必ずしも」などのように、必ず否定表現を呼応要素にするとは限らない。さらに、「なかなか」と「とても」のもう一つの特徴として、特定の場面であれば、「なかなか」と「とても」を使うだけで、文末が否定になるのが予想できることもありうる。例えば、

- (4) 財布のひもを握っている母親は「これ以上の借金とはとても」と首を振り、てんやわんやの騒ぎになった。⁷ 『天』

- (5) こんなむずかしいこと、わたしにはなかなか…。

しかし、普通の文脈ではむしろ例文(1)のような程度大の程度副詞の用法として読み取る可能性が高いのではなからうか。

従来の程度副詞に関する研究の中で、程度副詞の位置付けに関する議論が多く見られ、それを大きく分けると、二通りになる。一つは程度副詞を情態副詞とともに、情態性、静止性の属性にのみ関与する「ことが然的」⁸ なものとする立場であり、もう一つは程度副詞を陳述副詞と同じ範囲でとりあげ、これを述語の様相的意味への関与をもつ副詞として扱う立場である。山田が前者の立場であり、川端、森重が後者の立場である。後者の述語の様相的意味への関与をもつ副詞として、「もっと、すこし、ちょっと」などがよくあげら

⁵ただし、形の上で否定であっても、一つのまとまった概念を表すもの、例えば「不機嫌、不愉快」のようなものは程度副詞の修飾を受ける。

⁶陳述副詞とは「用言の実質上の意義と関係なく、陳述の方法のみを装定する」ものをさす。詳しくは山田(1936)および渡辺(1949)を参照されたい。

⁷「無理だ」という否定的な意味を表す形容動詞を下接する可能性もあるが、ここでは「できない」という動詞の否定形の下接を想定する。いずれにしても意味的には否定的であろう。

⁸工藤(1983)からの引用。本稿では命題にあたる。

れるが、「なかなか」と「とても」は前者として位置付けられるのが普通である。しかし、上述の(3)のように他の程度副詞に置き換えられないこと、また(6)のように(2)の「とても」と「なかなか」のかわりに他の陳述副詞を用いることができることから、「なかなか」と「とても」は単に情態性、静止性の属性にのみ関与する「ことがらの」要素であるとは言い切れない側面を持っていると言える。

- (6) 昔のままの東京駅ならいざ知らず、少なくとも、現状のものが東京の玄関口にふさわしい建物だとは(全然、まったく、とうてい、ちっとも、どうしても)思えない。

このように、「なかなか」と「とても」は「もっと、すこし」などと同様、程度副詞の性質を保有しながら、モダリティの要素も持っているということである。もちろん、そのモダリティの性格は文末表現によって表わされる話し手の命令、勧誘、意志などのモダリティのそれとは異なることは言うまでもない。

本稿はいままであまり問題にされなかった⁹「なかなか」と「とても」の否定の「ない」と呼応する用法をとりあげ、構文と意味、さらにモダリティとのかかわりについて考察を試みることにする。

2 構文的特徴

2.1 共起対象について

前節で触れたように、「なかなか」と「とても」が状態性の程度を修飾限定するものとして用いられる場合、形容詞、形容動詞、情態副詞、動詞とはすべて共起できる。ところが、否定の「ない」との共起関係を見ると、いささか事情が異なる。では、「なかなか」と「とても」は否定と呼応する場合、どんなものと共起し、また、どんなものと共起しないかを見てみよう。

- (7) a. * なかなか／とても おいしい
b. * なかなか／とても 便利ではない
c. * なかなか／とても しっかりしない

(7)の形容詞、形容動詞、情態副詞は否定形で用いられているため、不適格になり、もし、肯定形ならいずれも可能である。つまり、否定形と呼応すると言っても、形容詞、形容動

⁹ 「なかなか」と「とても」は否定副詞として、他の否定構文に用いられる副詞と一緒に扱われるものがある。本田(1981)を参照のこと。

詞、情態副詞とは共起しないことになる。¹⁰ 一方、動詞を見てみると、(8) に示されるように、同じ動詞でも a の「動詞語幹+ない」なら可能であるが、「テイル」形で用いられる b の否定形だと、共起不可能である。

(8) a. なかなか／とても できない (分からない)

b. * なかなか／とても できていない (分かっていない)

「なかなか」、「とても」が動詞の「テイル」形の否定形と共起しないのは(8)の「できる」という動詞に限らず、他の動詞についても言える。さらに動詞のもつ構文的特徴の角度から見ると、実際に「なかなか」、「とても」と共起する動詞と共起しない動詞とがある。表1を参照されたい。

まず、両方とも共起しうる動詞を見ていこう。A は動詞「ある」の否定形の「ない」であり、B は動詞の可能形である。「とても」と共起しうる動詞の否定形は以上の二種類であり、それ以外はほとんど共起しえないものである。A と B はどちらも三上の言う所動詞であり、また(8)の「分かる」も所動詞である。さらに、「とても～見えない」とか「とても～聞かえない」なども言えることから、「とても」と共起しうるのはいずれも所動詞だということが言えそうである。しかし、逆は真ではない。例えば所動詞の「要る」は「とても～要らない」ということはできない。表1を見ると、「とても」は動詞との共起において、「なかなか」よりも制約がきびしいということが言える。一方、「なかなか」は以上のほかに、Cのような意志動詞の否定形とも共起しうる。さらに、Dのような人間の生理的状态変化を表す動詞とも共起可能である。D類の動詞は意志の有無に関しては多少ばらつきがあり、「疲れる」は命令形や意志形あるいは願望を表す「～たい」で表すことができないが、それに対し、「太る、痩せる」はそのいずれの形でも可能である。従ってこの二つは意志動詞としてもさしつかえないが、C類の意志動詞と比べると、明らかに意志性が弱い。一方、E類の動詞は意味的にD類と異なり、人間の感情、精神作用を表しているが、意志性の有無という点でもD類より少し弱い。つまり、命令形や意志形さらには願望を表す「たい」の形で用いられるとやや不自然な場合がある。「なかなか」との共起という点においてはD類と比べて、やや成立しにくいようである。次はF類動詞であるが、肯定形にしても、否定形にしても、このままの形では使えない。また、意味的にも形容詞にかなり接近しているので、言い切りの場合は「～ている」の形で用いられ、連体修飾の場合は「～た」で用いられるのが普通である。最後はG類動詞であるが、単なる否定形のままでは「なかなか」と共起しにくい。後で述べるように他の構文的要素を付け

¹⁰この場合、他の程度大の程度副詞を用いても共起しないと思われる。例えば、*非常においしくない*相当便利ではない*かなりしつかりしない。

		なかなか	とても
A	～ない (ある)	○	○
B	～話せない ～できない ～泳げない	○	○
C	～食べない ～読まない ～歩かない	○	×
D	～太らない ～疲れない ～痩せない	○	×
E	～興奮しない ～喜ばない ～悲しまない	?	×
F	～すぐれない ～ばかげない ～ずばぬけない	×	×
G	～張り切らない ～信頼しない ～頑張らない	??	×

表 1: この表は森田 (1982) の意味的特徴による動詞の分類を主に参照してまとめたものである。A 所有 B 能力, 可能の意味 C 意志的他動行為 D 主体の生理状態の変化 E 主体の感情, 精神作用 F 主体の性質状態 G 態度的な状態 (仁田 (1983))

加えれば, 成立しやすくなる。

2.2 他の構文要素との共起

実際に「なかなか」と「とても」が動詞と共起する場合, 必ずしも「動詞語幹+ない」の形だけではない。他の構文的要素が付け加えられることもある。

(9) まりちゃんはさっきからおびえてて, なかなかねむろうとしませんでした。

(10) みかけ成り金のこの日本の現状はなかなか (とても) 外国には分かってもらえない。¹¹

(11) 保育所の朝は早く, 早出は午前 7 時 30 分から勤務です。1 歳の長男に「ママ早出だから早く起きて」と言っても, なかなか起きてくれない。

(12) なかなか/とても できそうもない。

(9)～(12) にはそれぞれ意志を表す助動詞の「～う」, 授受表現の「～てくれる, ～てもらう」の否定形 (「～てもらえない」は可能態の否定形), 様態助動詞「～そうだ」などの構文的要素が付加されている。中でも意志形の「～う」と授受表現の「～てくれる」は「なかなか」と, 予想の「～そうもない」は「とても」と呼応して用いられるのがもっとも多い。これらの構文要素と「なかなか」, 「とても」との共起関係は必ずしも一律的ではないが, これを示すと, 次の表 2 のようになる。 「なかなか」, 「とても」とこれらの構

¹¹ 「とても」は筆者の付け加えたものである。ここでは「なかなか」のかわりに用いられる。

	なかなか	とても
動詞＋うとしない	○	×
動詞＋てくれない	○	×
動詞＋てもらえない	○	○
動詞＋そうもない (様態助動詞)	○	○
動詞＋てくれそうもない		
動詞＋てもらえそうもない	○	○
動詞＋れ／られ (可能助動詞)	○	○

表 2:

文的要素との共起を可能にしたのは両者の意味的特徴によるが、実際に表 1 の G で見たように単なる動詞の否定形の場合、「なかなか」、「とても」と共起不可能であったにもかかわらず、(13) のように「～てくれない」あるいは「～てもらえない」をあらたに付加すると、自然な文になるのである。

- (13) a. * なかなか信頼しない
 b. なかなか信頼してくれない
 c. * とても信頼しない
 d. とても信頼してもらえない
 e. * なかなか喜ばない
 f. なかなか喜んでもらえない

これについては、3 で詳述する。

2.2.1 「なかなか」と「とても」のモダリティ性

肯定文に現れる「なかなか」と「とても」は

- (14) a. なかなか／とても すばらしい人が現れた。
 b. なかなか／とても いい案ができた。

のように、形容詞などの具有する状態的な「実質概念」¹² の程度を修飾限定する、いわば命題内成分として用いることが可能である。「なかなか」と「とても」が連体修飾成分の中にとどまることから分かるように、それらは状態性の属性にのみ関与し、モダリティ

¹²北原 (1981) からの引用。

とは無関係なのである。ところが、同じ「なかなか」、「とても」が否定の「ない」と呼応して用いられる場合、肯定文とはやや異なる様相を呈している。(15)は連体修飾に用いられる「ない」に呼応要素の「なかなか」と「とても」を付け加えた例である。

(15) a. なかなか/*とても 分からない人がいれば…

b. なかなか/*とても 時間どおりに来られなかった理由を話して下さい。

(15)において、「とても」と比べて、「なかなか」のほうが許容度がすこし高い。その「なかなか」が連体修飾成分の内側に一応とどまっているのに対し、「とても」が連体修飾成分の内側に現れえないことが観察される。もっとも、(15)bについて「なかなか」は連体修飾成分の内側にとどまりにくいという意見もある。この連体修飾成分の内側にとどまるか否かという点から、両者のモダリティ性を見れば、「なかなか」よりも「とても」のほうがモダリティ性が強いといえそうである。また、過去の否定形との呼応でさらに連体修飾の内側にとどまるかどうかを見ても、「なかなか」と「とても」に違いが見られる。

(16) なかなか/*とても 言えなかったことが一つある。

(16)は(15)と同じように、「なかなか」は連体修飾成分の内側にとどまっているのに対し、「とても」は連体修飾成分の内側にはとどまらないことを示している。

益岡(1991)では「ない」を「みとめ方のモダリティ」として位置付け、「ない」は「事態が成り立つか成り立たないかの判断」を表すものであるが、客観的表現になり得る。「すなわち、表現者の判断を表すとはみなせない用法、表現時以外の時点で判断を表す用法、[~こと]のような表現の内部で使われる用法」を持つという。益岡はこのような特徴を持つ「ない」を「二次的モダリティ」とみなし、一方、否定の核要素の「ない」と呼応して用いられる「決して、必ずしも」などを呼応要素としている。この意味では形式上「なかなか」と「とても」も「決して」などのように一種の呼応要素と言える。すなわち、「なかなか」は言い切りの形をとっている「ない」と呼応して用いられる場合、みとめ方のモダリティを表す核要素の「ない」の呼応要素として働き、それ全体を一つのモダリティとして位置付けできる。ただし、「ない」が連体修飾成分として、さらに他の名詞成分が下接した時点で主観的表現であった「ない」が客観的表現に変わり、同じように「ない」の呼応要素として働いていた「なかなか」もいわば客観的表現に変わってしまうのである。この点からみれば、「なかなか」はいわば客観化を許す副詞と言える。それに対し、「とても」は否定の判断のモダリティを表す核要素である「ない」の呼応要素として、主観的表現に属する点においては、「なかなか」と同じであるが、客観化を許さないという点では「なかなか」と違う。

これまで「なかなか」と「とても」は「ない」と呼応して用いられる場合、前者は「ない」が言い切りの場合、一応モダリティの核要素の「ない」の呼応要素として働き、主観的表現に属しながらも、「ない」の後ろにさらに名詞成分が続く場合、それまで主観的表現であった「なかなか～ない」が客観的表現になりうること、それに対し、「とても」は同じモダリティの「ない」の呼応要素であり、主観的表現に属するとともに、客観化をも許されないことを述べてきた。

「なかなか」について言えば、客観化を許容するものの、許容の過程においては他の副詞といささか異なることも事実であろう。「なかなか」と「どうしても」との違いを比べてみよう。

- (17) a. 彼はなかなか行こうとしない。
b. 彼はどうしても行こうとしない。

- (18) a. ? なかなか行こうとしない人を行かせたら、大変なことになる。
b. どうしても行こうとしない人を行かせたら、大変なことになる。

(17)の「なかなか」と「どうしても」は意味の違い（それについては後述する）はあるものの、文としての適格性という点から見れば、いずれも同じ程度の自然な表現として受け入れることができよう。一方、連体修飾成分を付加した(18)では「なかなか」を用いたaは非文とは言えないものの、「どうしても」を用いたbのほうがより自然な表現と感じるのではなからうか。つまり、「どうしても」は(17)と(18)のbが同じように自然な表現であるのに対し、「なかなか」は(18a)よりも(17a)のほうがより自然な表現ではなからうか。われわれの日常言語生活において、(18)aよりも(17)aのような形をとるのが普通ではないかと思う。次の(19)、(20)についても同じことが言える。

- (19) a. なかなか教えてくれない
b. どうしても教えてくれない

- (20) a. ? なかなか教えてくれない人にはいくら頼んでも無駄である。
b. どうしても教えてくれない人にはいくら頼んでも無駄である。

3 意味的特徴

第2章の構文的特徴では「なかなか」と「とても」の共起対象、並びにそれらのモダリティ性などについて述べてきた。この章においては「なかなか」と「とても」の意味的特徴を中心に考察する。

3.1 「とても」の意味特徴

『学研国語大辞典』によると、「とても」の意味は以下の通りである。

とても：どんな方法をつくしても、どうしても、とうてい。

この辞書的な意味では「とても」は「どうしても」と共通し、置き換えてもよいということになっている。(21)で示されたように、この二語はたしかに同じような文に現れうる。しかし、モダリティ性という点では必ずしも同じではない。そして、意味上においても、ずれがある。

(21) とても／どうしても 自分の服を買うお金がない。

「とても」は現状（例えば：給料が極端に少ない、またはほかの出費が多いとか）をよりどころにして、判断を下す場合に用いられるのに対し、「どうしても」はさまざまな手段（例えば：他の出費を減らしたり、節約したりする）を尽くしたにもかかわらず、結局自分の服を買うお金がないというやむなき結果に至った場合に使用される。第 2 章の共起対象のところでも示したように、「とても」は可能動詞、或は動詞の可能態などの否定形とよく呼応することからも気付くように、「とても」は目的の達成が不可能であるという話し手の判断や事態の成り行きに対する話し手の予想を表す。努力する、しないに関係なく、はじめから話し手がその事態が実現不可能である立場に立って発話している。従ってよく(22)のように予想の助動詞の否定形「～そうもない」と共に用いられる。

(22) 部長級のエリート数人が逮捕されはしたものの、「本社からの指示はなく、自分一人の判断でやった」と口は堅く、とてもこれ以上、上にはのびそうにもないとも言われる。『天』

以下も「とても」を用いた例文であるが、ある状況から事態の実現の見込みがないのだという話し手の予想、判断を示すよい例といえる。

(23) 交通遺児家庭の平均月収は八万円を割る、というから、こういう家庭の子はまるまる借金をしなくてはとても五十万円を払えない。『天』

(24) 現在は国連の出先機関と宗教団体が難民の面倒をみているが、数がさらにふえれば、とても手が回らない。『天』

ここで注意してよいのは「とても～ない」という文において、その従属節は仮定形が多いということである。つまり、「とても～ない」という主文の予想、判断は仮定形の従属節

に基づいて行われる場合が多い。そしてもう一言付け加えておくと、「とても」による事態の実現の見込みがないという予想あるいは判断は当然主節の述語についてであることは言うまでもないが、その場合、述語は話し手自身の動作、行為であってもよいし、また話し手以外のものでもよい。(23)(24)は後者であり、次の(25)は前者である。

(25) トイレもお風呂もないんだって。こんな家にはとても住めない。

自分自身の動作、行為の実現の見込みがないと予想し、判断するのはいわば自らの意志を不問にし、より客観性をもたせるという効果がある。たとえ、そうする意志があっても、現状がその実現の妨げとなっているから、その行為自体を行う必要がないという拒否の姿勢が見られる。

一方、「どうしても」は事態の成り行き予想、判断というよりも、むしろ事態の結果の説明、報告を表す。次の例を見られたい。

(26) 家庭にいて、近くのパン屋へちよつとお使いにいったといえば、喜んで行くのだが、学校となると、どうしても行こうとしない。『天』

(27) 財政法にあるとおり、本来“借金を財源に充ててはならない”のだから、人件費や事務経費などその場限りで消えてしまう出費に充てる赤字国債など、もつてのほかなのだが、どうしても他に財源が確保できず、やむを得ない特例措置として認められている。『世界』

(28) 子供のころは一銭のヤッコ凧しか買えなかったが、これがどうしてもニシキ絵の角凧にかなわない。『天』

これらの例は形の上では現在形を用いながら、意味の上では明らかに過去であった(あるいはこれまでの)事態の結果について説明している。次の例は否定の過去形とともに用いられ、形の上でも、また意味の上でも過去の事態の結果の説明となっている。その意味で「どうしても」は現在形で未来を表す事態の説明には不向きである。

(29) 昨日は忙しくて、どうしても行けなかったんだ。

次の(30)は一見事態の結果の説明の用法に反するような例であるが、これは仮定形で、その事態がそうした結果に至ったならばという仮定の意味であり、基本的には「どうしても」の事態の結果の説明の用法と一致していると言える。

(30) どうしても来ないのなら、捕まえる。『読』

すなわち、「どうしても」がたとえ否定の現在形と呼応して用いられても、(26)(27)(28)のように事態の結果(過去)の説明か、(30)のように仮定を表すかである。

3.2 「なかなか」の意味特徴

まず次の例を見よう。

(31) なかなか自分の服を買うお金がない。

前述のように、この文は「とても」、「どうしても」を用いても可能であるが、意味的には同じではない。「とても」は現状を根拠に事態の実現の見込みがないという話し手の予想、判断を表すが、「どうしても」は主として事態の実現が不可能になったという話し手の説明、報告を表すものである。これに対し、「なかなか」は事態の実現が容易ではないという話し手の判断を表す。つまり、「なかなか～ない」はその事態の実現の可能性がないわけではないが、実現するまで大変な困難(時間、労力など)を伴うことを表すところに重きが置かれている。

(32) 辞書を引いても、なかなか理解できない。

(32) は事態の実現がいかに大変であるかを従属節を用いて強調している。すなわち、辞書を引くという手段に訴えても、なかなか理解できるものではないことを表している。ここでは従属文は譲歩の「～ても」という仮定の形で使われているが、次の(33)は「～した」という既定の形で用いられている。

(33) 辞書を引いたけれども、なかなか理解できなかった。

この文は実際に辞書を引くという措置をとったにもかかわらず、事態がまだ実現していないことを表している。(32) と (33) はいずれも「なかなか」を「とても」に置き換えることができない。というのは「とても」は前述のように最初から事態の実現が見込めないという話し手の予想、判断を表すものである以上は、その実現のために具体的な措置をとっても無駄であるのみならず、従属節と主節と意味的には抵触してしまうのである。一方、「なかなか」はそうした事態の実現が容易でないことを表すと同時に、事態が思うようにいかないという、話し手が事態の実現についてのある程度の期待をもっているが、しかし、期待にそむく結果になるという、いわば期待はずれの気持ちをも多少込めている。従って、事態が自分の思うどおりにはかどらない場合は、よく「なかなか」が用いられる。例えば、

(34) 「火事よ逃げるよ」と叫ぶと床に入ったばかりだった娘達はすぐ駆け出てきました。ローソクの火を消すと共に玄関のドアを開けようとチェーンをはずし、そのすぐ下にあるはずの鍵がなかなか手に当たりません。ブルブルと自分の手が振えているのを感じ……。 『保』

- (35) 王貞治氏の引退発表後の最終オープン戦(熊本・藤崎台球場)で、王選手に代わってファンに感謝の放送をしたこと。「緊張して声になかなかでなかった」 『読』

つまり、(34)(35)ではその事態が実現してほしかったけれども、それがまだ実現しないという話し手の期待はずれの気持ちを表している。ここでいう「なかなか」によって表される話し手の期待はずれとは話し手がその事態の実現を希望する時点では、それがまだ実現に至っていないということである。もっと言うならば、結果として最終的に事態の実現があるか否かは不問である。(35)は実際には「声が出た」つまり、「放送した」というふうと考えられ、一方、(37)は実際には最終的に取り合わなかったかも知れない。次の文は「～てくれない」とともに用いられているが、その事態が実現できたらいいなど思っているものの、それが実現していないという話し手の期待はずれの気持ちをもっともよく表されている。

- (36) 保育所の朝は早く、早出は午前7時30から勤務です。1歳の長男に「ママ、早出だから早く起きて」と言ってもなかなか起きてくれない。 (前掲)

- (37) 今年の警察白書の副題は「ポーダレス時代における犯罪の変容」だ。犯罪も国境や県境を超えて、簡単には足が付かない。そのうえ、都会に限らず地方でも近隣の付き合いが希薄になった。刑事が聞き込みに行っても、「何もわかりません」となかなか取り合ってくれない、と白書は嘆く。 『読』

「～てくれる」は一般に授受表現として取り上げられているが、その中に受益も当然含まれている。次の例を見られたい。

- (38) a. ようやく雨が降ってくれたね。
b. うちの子は12時になっても寝てくれないから、……。

(38a)は受益の意味を表し、bは非受益の意味を表している。一般にその事態の実現が自分の利益につながる(受益)ことであれば、その実現を希望するのが人間のもっとも正直な気持ちであり、逆にその事態の実現が自分にとって不利益であれば、当然実現してほしくないのがこれもまた極当然なことである。この意味で2.1で述べた、単なる「動詞語幹+ない」の場合、「なかなか」を用いても言えないが、「～てくれない」を付加すると、自然な文になるというのも、実は「なかなか」と「～てくれない」のいずれも話し手にとって望ましくないことであるという共通の意味合いを持っているからであろう。このような理由で両者がよく共起するものと考えられる。

4 おわりに

本稿は構文、意味、さらにモダリティとのかかわりという角度から、「なかなか」と「とても」の共起対象、他の構文要素との共起、それぞれのモダリティ性および意味合いについて見てきた。

これまでの記述で「なかなか」と比べ、「とても」のほうが構文にしても、意味にしても、より制限を受けることが明らかになり、モダリティ性から見ても、「とても」が「なかなか」より強いことが分かった。また、「なかなか」と他の構文要素と共に用いられる場合（特に授受表現の「～てくれる」の否定形「～てくれない」との関係）について論述を試みた。しかし、何故意志助動詞「～う」（～ようとしな）とよく共起するのかという点についてはまだ解決の糸口が見付かっていない。このほかにも、まだ問題あるいは疑問に思っていることが少なからず残っているが、今後の研究課題としたい。

謝辞

本稿を執筆中例文のチェックには九州国際大学の柴田和子先生にお世話になった。記して感謝の意を表す。

[例文の出典]

『天』→『天声人語』 昭和 52(春の号～冬の号)28～31 朝日新聞

「世界」→「世界」 臨時増刊第 570 号 1988.1 岩波書店

「読」→「読売新聞」

「保」→「保育所だより」

参 考 文 献

北原 保雄. (1981) 『日本語助動詞の研究』. 大修館書店.

工藤 浩. (1983) 「程度副詞をめぐって」. 『副用語の研究』. 明治書院.

竹内 美智子. (1973) 「副詞とは何か」. 鈴木一彦・林 巨樹 編, 『品詞別 日本文法講座』. 明治書院.

張 麗群. (1992) 「程度副詞の体言修飾について」. 『日本語と日本文学』, 第 16 号. 筑波大学国語国文学会.

寺村 秀夫. (1978) 『日本語の文法(上)』. 日本語教育指導参考書 4. 国立国語研究所.

寺村 秀夫. (1981) 『日本語の文法(下)』. 日本語教育指導参考書 5. 国立国語研究所.

- 寺村 秀夫. (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』. くろしお出版.
- 寺村 秀夫. (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』. くろしお出版.
- 本田 治 (1981) 『日本語の否定構文 (1)—「否定副詞」の分布をめぐって (前)—』.
- 益岡 隆志 (1991) 『モダリティの文法』. くろしお出版.
- 三上 章 (1972) 『現代語法序説 シンタクスの試み』. くろしお出版.
- 森田 良行 (1980) 『基礎日本語 2』. 角川書店.
- 山田 孝雄 (1936) 『日本文法学概論』. 宝文館.
- 楊 凱榮 (1994) 「受益表現について - “給” と “てあげる, てくれる” との比較を中心に-」, 『教養研究』第1巻第1号 九州国際大学.
- 渡辺 実 (1949) 「陳述副詞の機能」. 『国語・国文』, 18-1.

Degree adverbs appearing in negative constructions

Zhang Li qun

“NAKANAKA” and “TOTEMO” as degree adverbs are used not only as propositions but also in expressions with “NAI” (negative constructions) that shows modality.

this paper examined the latter usage and the following are the results. (1) When “NAKANAKA～NAI” is used as a sentence final, it has modality. However, if a noun ingredient follows after “NAKANAKA～NAI”, it has objective expression.

(2) “TOTEMO～NAI” has stronger modality than “NAKANAKA～NAI”, and doesn't allow objectification.

(3) “NAKANAKA” shows the speaker's judgement that one's own wishes cannot easily be realized. Sometimes it includes a feeling of disappointment.

(4) “TOTEMO” also shows the speaker's judgement that one's own wishes cannot easily be realized, and the speaker's anticipation of the development of the situation.